

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 後藤一美教授定年退職記念号に寄せて

著者	荒谷 裕子
出版者	法学志林協会
雑誌名	法学志林
巻	115
号	3
ページ	1-3
発行年	2018-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00023088">http://hdl.handle.net/10114/00023088</a>

# 後藤一美教授定年退職記念号に寄せて

法学部長 荒谷裕子

後藤一美先生は、三〇余年にわたり海外経済協力基金（OECF）で発展途上国の経済発展に寄与する業務に携わってこられたのち、一九九九年九月法政大学法学部教授に着任されました。以来、二〇一七年三月末日をもって法政大学法学部を定年退職されるまで、ご専門である国際援助政策論や、国際協力論を中心に、一七年七ヶ月の長きにわたり、学生や院生を熱心に指導されるとともに、国際開発学会理事・常任理事を務められるなど研究さらには学会等において多大な業績を残されました。

法学部は、従来の法律学科、政治学科に加えて、「地球共生社会」の実現を目指して、未来志向型の人材を育成するというコンセプトのもと、二〇〇五年に国際政治学科を、二〇〇六年には大学院政治学研究科に国際政治学専攻を新設しました。後藤先生は、その企画からカリキュラムの構築等に至るまで深くかわられるとともに、二〇〇七年から二年間、国際政治学科主任を務められるなど、現在の国際政治学科、大学院政治学研究科国際政治学専攻の礎を築されました。国際政治学科では、当時としては画期的な試みであり、今でも外部から高い評価を得ている一年生全員参加型のオックスフォードプログラム（HOP）や、海外の企業・国際協力関係機関・NGOなど国際社会の現実に触れる実践講座など他大学にはない特色ある科目を数多く設置しておりますが、後藤先生には、これら先端的な科

目の実現にもご尽力をいただきました。

法政大学では、二〇一四年から「学生が選ぶベストティーチャー賞」が設けられましたが、賞制定当初から定年退職されるまでの三年間連続して「ベストティーチャー賞」を受賞されたほか、二〇一五年度・二〇一六年度には二年連続して「最高票数獲得賞」を受賞されました。先生の講義は、教壇で講義をするというスタイルではなく、マイクを片手に教室内を歩き回って学生とコミュニケーションをとりながら授業を進めるというスタイルであったと伺っております。このスタイルは、まさに今われわれに求められている双方向授業、学生参加型授業の模範ともいえましよう。大教室でこうしたスタイルを採用し継続することは経験上大変なことだと思いますが、これを実現できたのは、ひとえに先生の実務経験に裏打ちされた豊富な学識と魅力的な話術、温かいお人柄によるところが大きいのではないかと推察いたします。

私自身は所属学科、専門が違うということもあり、先生と研究分野で議論を交わす機会はありませんでしたが、教授会懇親会などでは、いつも豊富でウィットに富んだ会話で場を和ませて下さるとともに、ご趣味のカメラを片手に私をはじめ同僚の先生方の写真をとっていらしゃったお姿が印象に残っております。

先生は、「学生が選ぶベストティーチャー賞実施報告」（法政大学教育開発支援機構）の受賞感想の中で、退職後の夢は、卒業生が『夢追い人』として「日本国内のみに留まらず、世界各地で夢を追う姿を夢見ることです」と語っていらっしゃいますが、先生ご自身も、混沌とした世界情勢の中にあって、今後益々必要とされる世界協力の促進にご尽力され、世界の中で夢を追い続けていただきたいと思っております。かつての同僚の一人として、先生の益々のご健勝と一層のご活躍を念じてやみません。

先生の学内外での貢献に対して、法学部教授会は、二〇一七年四月、先生を名誉教授に推薦することを決定し、大

学よりその称号が授与されました。

本誌は、後藤一美先生の偉大な業績と活躍を讃えるとともに、法学部へのご尽力に対して、法学部教授会一同、深甚なる感謝の意を込めて先生に捧げるものです。